

食を通しての宗教実践

——スィク教徒移民のランガルの事例

東 聖子

AZUMA Masako

ラウンドテーブルでは、食を通しての宗教実践の事例として、スィク教徒移民のランガルについてとりあげた。ランガルとは、一般的にスィク教寺院で振舞われる食事のことを指す。このランガルを通じた移民の宗教的実践に着目したラウンドテーブルの内容をもとに、移民の宗教と食の関係についてあらためて考えてみたい。おもな考察の対象となるのは、筆者が2015年より断続的に訪れているカナダのトロント近郊にあるスィク教寺院とそこでのランガルである。まずは、スィク教とランガルについての概説から始めたい。

1. スィク教とランガル

スィク教とは15世紀後半に開祖ナーナクによりインド亜大陸の北西部にあるパンジャブ地方で始まった宗教である。当時の人々が信仰していたヒンドゥー教やイスラーム、スーフィズムなどの要素を引き継ぎつつ、それらの批判的な解釈を織り交ぜ、あらたな宗教として成立した。開祖から10代目までグルと呼ばれるリーダーが信徒を導いていたが、10代目のグルであるゴービンド・スィングが後継を指名せず、代わりに聖典の教えに従うよう説いたと言われる。そのため、現在では、どのスィク教の寺院にも聖典が置かれ、聖典そのものがグルのように丁重に扱われている。

パンジャブ地方は1947年のインド・パキスタン分離独立に際し、インド領パンジャブとパキスタン領パンジャブに分断されることとなった。その際、同地方のヒンドゥー教徒とスィク教徒はインド側に、ムスリムはパキスタン側に移動した。そのため、現在スィク教徒の多くはインドのパンジャブ州に暮らしている。そのほか、イギリス、カナダ、アメリカ合衆国、オーストラリアなどへの移民も多い。

ランガルとはスィク教の寺院で振る舞われる食事を意味し、free kitchen、free

community kitchen などと訳される。聖地の大きな寺院ではランガルを準備するための調理場と食事をするためのランガル・ホールが備わっており、毎日ランガルが準備される。小さな寺院では調理場やランガル・ホールはなく、多くの人が集まる祝祭日のみに屋外でランガルが振る舞われる。信徒であるかどうかに関わらず、寺院には誰でも自由に入ることができ、ランガルも同様に誰でも自由に食することができる。

ランガルは、皆が同じものを同じように一緒に食べることで、社会的な地位や身分に関係なく、みな平等であることを示す行為だとされる。同じ場所（寺院内）で調理されたものを、誰もが同じ場所に座って一緒に食べる、というお互いの平等を示す実践が、ランガルを通しておこなわれている。というのも、スィク教発祥の地であるインド亜大陸に信徒の多いヒンドゥー教には、浄・不浄という考えがあり、インド社会にみられるカーストによる社会階層は、浄性と不浄性の度合いによってその位置付けが決められる。さらに、人々が食事を共にすることで、不浄が伝染すると考えられているため、それを避けるため共食や食物の授受に制限がみられる（小磯 2006、松尾 2011）。一方、スィク教では、浄・不浄に基づき序列化されたカーストによる社会階層を否定しており、このスィク教の思想を実践する場として考えられているのがランガルである¹。

また、食事を必要とする人に分け与えることも、ランガルの意義として説明される。ランガルの準備、給仕、片付けなどの作業は、セーワと呼ばれ、スィク教徒が従事すべきとされる神への奉仕実践として捉えられている。そのため、寺院を訪れた人がこれらの作業に従事する姿をよくみる。

多くのスィク教徒は婚礼や葬送などの人生儀礼をスィク教寺院で執り行うが、その際に集まった人々に振る舞われる食事もランガルと言われる。この場合、儀礼のみを寺院でおこない、ランガルは自宅等で振る舞われることもある。ランガルの場所が寺院内でも外でも、儀礼の主催者家族がランガルを手配する。

他にも、スィク教徒の団体が被災地等でおこなう炊き出しサービスもランガルと呼ばれる。どのような場面であっても、ランガルはどんな人でも口にできるように菜食が用意され²、かつ、過度ではないシンプルなものであるべきとされる。

2. 移民先でのランガル

スィク教徒はランガルを信仰実践のひとつとして捉え、幼少時から幾度となく経験す

-
1. スィク教の教義において、カーストによる社会階層序列は否定されているものの、実際にはスィク教徒の間でもカーストは存在し、意識され続けている。
 2. インドではヒンドゥー教徒やジャイナ教徒をはじめとする菜食主義者が存在し、スィク教徒のなかでも菜食主義をとる人は少なくない。

る。海外のスィク教寺院にもランガルは存在し、移民にとってもランガルは信仰実践として経験されている。ここでは、移住先におけるランガルについて、カナダのトロント近郊の事例をみていくが、まず、移民が経験するランガルのよくある場面を3つ紹介したい。トロント郊外の寺院では、スィク教聖地にある大きな寺院同様、毎日どの時間でもランガルが準備されているが、以下はいずれも寺院内でランガルが利用される典型的な場面である。

週末の昼間

スィク教寺院には週末の昼間に多くの人が集まる。仕事や学校が休みとなる週末に家族で寺院を訪問することが多いためだ。礼拝のためのホールに座り、聖典の読誦に耳を傾け、讃歌を歌い、しばらく時間を過ごす。その後、ランガル・ホールに移動して食事をする。これが週末の昼食となる。週末の昼間のランガル・ホールはとても混雑する。食事をする人のほか、給仕や食器の片付けなどセーフをする人の姿も目立つ。

平日の夜

寺院では平日の朝と夜に聖典の読誦と讃歌の演奏があるため、仕事を終えた平日の夜に寺院に足を運ぶ人も少なくない。礼拝ホールにしばらく座り、その後ランガルホールで食事をする。これがその日の夕食となる。食事のほか、夕方以降はインドでよく飲まれているチャーイと呼ばれるミルクティとともに、菓子やスナックが準備されている。食事をせずにチャーイとスナックをとることもできるし、ランガルでの食事の後にさらにチャーイとお菓子でゆっくり時間を過ごすこともできる。

親戚や縁者の儀礼参加後

おもに週末の寺院では、昼間の礼拝のほか、信徒の婚礼や葬儀、追善供養などがおこなわれている。寺院にはメインの礼拝ホールのほかに、いくつか部屋があり、儀礼の参加人数に応じたサイズの部屋を利用する。家族が儀礼実施および部屋の予約をし、親戚や縁者が当日儀礼に訪れる。部屋での儀礼が終わると、参加者はランガルホールに移動する。主催する家族は通常の寺院が準備するランガルとは別に、自分達で軽食や飲み物などを手配し、参加者にランガルを振る舞う。

3. ランガルの準備から片付けまで

以上が一般的によくみられるトロント近郊でのランガルの場面であるが、次に、ランガルの準備から片付けまで、調理、給仕、食事、片付け、の4つの過程について、それぞれがどのようにおこなわれているのかを説明する。

調理

ランガルの材料は寺院の運営費で購入されるが、一部は信徒の寄進で賄われる。チャーイのための牛乳、薄焼きのパンのための小麦、米などがよく寄進される。献立は毎日異なるが、それぞれの寺院で毎週ある曜日に決まったおかずが提供されるなど、ある程度の規則性もある。この決まったおかずのなかには、多くの人に好まれつつも手間がかかるので家ではなかなか作れないようなメニューがある。家庭では特定の季節や特別な機会に作られることが多いため、毎週そのようなメニューが寺院で提供されるというのは、移住先の寺院ならではの特徴といえる。

調理を担うのはおもに寺院住み込みの男性スタッフであるが、セーワの一環として調理を手伝いに来る人もいる。老若男女誰でも手伝うことが可能だが、自由な時間が比較的多い60～70歳代の男女の姿が多い。親戚縁者を集めた儀礼や寺院が催すイベント後のランガルでは、菓子やコーラなどの清涼飲料が提供されるが、そのような寺院内で作ることができないもの以外は、全て寺院のキッチンで調理するのが基本である。また、儀礼を主催する家族がランガルを手配する場合、家族が材料を購入し、調理自体は寺院スタッフに任せるのが一般的である。

給仕

参拝者の一部がセーワとしてランガルの給仕をおこなうことが多い。父と息子が親子で給仕をする様子もよく見かける。家庭において食事の給仕をするのは一般的に女性であるが、ランガルでは男性が給仕をしており、この傾向は出身地インドでも移住先カナダでも同様である。家族の人生儀礼等の後に用意されるランガルの場合、家族や親しい親族が給仕をしている。この場合は女性が給仕をする姿もみられる³。

3. 不特定多数の人が訪れるランガルにおいて男性がおもに給仕を担っているのは、インド亜大陸北西部でみられるパルダールという女性隔離の慣習が影響しているかもしれない。また、家族の儀礼後のランガルの場合、集まる人々が「身内」であることから、女性が給仕することへの抵抗が少ないものと考えられる。

食事はビュッフェ形式で並べられる。大抵の場合、米飯、チャパーティと呼ばれる薄焼きのパン、おかず2品ほどが並んでいる。いずれも北インドで一般的に食べられているもので、おかずは豆と野菜が一品ずつ準備されることが多い。食べる人は各自皿をもって列をなす。給仕する人と食事を取る人は並んだ食事を挟むかたちになり、給仕する人が食べる人の皿に各品を盛る。その隣には食事用のスペースが広がっていて、床に一列に座って食べる。おかわりは自由だが、再び立ってとりに行く必要はない。おかわり用の食事を給仕する人が、バケツに入った食事を持ち、おかわりが欲しいかどうか尋ねながら、座って食べている人の前を行ったり来たりする。おかわりが欲しい人がいれば、その場で皿に追加してくれる⁴。参拝者の少ない時間であれば、給仕する人が誰もいないこともある。その場合は自分で皿によそい、おかわりも自分でとりにいく。

食事

ランガル・ホールの床には長いマットが敷いてあり、そこに座ってランガルを食べる。床に座るのが難しい高齢者などのために、椅子もいくつか置いてある。プラスチックの丈夫なコンテナケースを逆さに置いて椅子として使うことも多い。誰がどこに座ってもよく、男女別などの決まりもない。

各自が食べきれぬ量を皿に盛り、食べ残しがないようにするのが原則である。提供されているメニューを全て食べなくてもよい。嫌いなものや食べたくないものがあれば、皿によそう必要はない。それでもランガル・ホールには「食べ物を無駄に捨てないように」と注意を促す貼り紙があることから、実際は食べ残しがみられるようだ。

子供向けのイベントが寺院でおこなわれる日には、コーラやジンジャーエール、スプライトなどソフトドリンクのほか、チョコレートやポテトチップスが子供用に提供される。これらは外部から調達している。ランガルの食事は通常持ち帰ることはできないが、これら子供用のお菓子は持ち帰ってもよいし、そこで食べてもよい。

片付け

ランガル・ホールには洗い場があり、食べ終わった食器を各自そこにもっていく。カップ、仕切りのある皿、スプーン、いずれも破損の心配なく扱うことができるステンレス

4. いったん食事をはじめると、唾液を通して不浄が伝播するため、自身でお代わりをよそうのではなく、誰かが給仕をする必要性が指摘されている（松尾 2011）。この指摘は、ヒンドゥー教徒の食にまつわる浄・不浄に関するものだが、ヒンドゥー教の菜食や浄・不浄の考え方をある程度共有するシク教徒は少なくないため、ランガルでの給仕もこの影響を多少は受けているものと考えられる。

製の食器で、南アジアで一般的に使われているものだ。食べ終わった皿を集めて洗い場にもっていくというセーワをする人がいる場合、その人に食べ終わった皿を手渡せばよい。

自分で皿を洗い場に持っていき、そこに置いて帰ってもよいし、セーワとして自分で洗ってもよい。洗うのは自分の皿だけでもよいし、他の人の皿や流しに溜まっている分を洗うこともある。自分に時間があるかどうか、皿洗いをしている人が十分いるかどうかなど、状況により片付けのセーワをするかどうか各自判断する。

洗った食器は自然乾燥させるか、タオルで水分を拭き取り、カップ、皿、スプーンのそれぞれが入ったケースにしまう。次の人がすぐ使えるようにカップ、皿、スプーン、紙ナプキンの一式をセットにしておく場合もある。

4. ランガルの経験がもたらすもの

上記のような寺院におけるランガルの様子とランガルに関わる一連の作業は、それらを体験する人々にとってどのような意味をもつのだろうか。以下では人々がランガルをどのような機会として捉えているのかを考察したい。

次世代教育の場としてのランガル

子どもと一緒に寺院を訪れる家族連れの様子は少なくない。寺院自体が子ども向けのクラスやイベントを実施することもあり、そのようなプログラムへの参加が次世代教育の一環であることは言うまでもない。しかしながら、寺院を訪れる全ての家族が、そのようなプログラムに子どもを参加させるわけではない。とはいえ、子どもがプログラムに参加しない場合でも、ほとんどの子どもが家族とともに礼拝ホールとランガル・ホールで時間を過ごす。

寺院内の各スペースでどのように振る舞うべきか、子どもたちは大人と一緒に寺院を訪れることで振る舞い方を身につけていく。寺院に集う信徒やそのコミュニティ、寺院や聖典の重要性やランガルの意義なども、寺院に足を運び大人たちと会話を重ねながら学習していく。讃歌を聴いたりランガルで食事をしたり、セーワをしたりすることで、大人とともに宗教実践をおこなっている。ランガル・ホールの光景を見慣れている子どもも多いため、ランガルにかかわるセーワは、子どもにとっても気軽に実践できるものである。大人にとっては、子どもにスィク教について教える次世代教育の場となっている。

子どもにとってのランガルは、その日の食事、もしくはその日のおやつ、というようにしか認識されていないかもしれない。チョコレートなどがあるときには、一目散に貰

いにいく子どもの姿もあり、その日の「ご褒美」に釣られて寺院に来ることもあるかもしれない。それでも、幾度とランガルを経験することを通して、同じ食事を分かち合っ
て一緒に食べるという宗教実践を重ねることになる。

ランガルの実利的側面

大人にとっても、ランガルが日々の食事の選択肢として存在する。移住後間もなく生活のリズムが整うまでの時期、食費の支出がままならない時、仕事の忙しさや体調不良により食事の支度ができない時など、ランガルでの食事が選択肢となる。ランガルは誰でも利用できるとはいえ、スィク教寺院を訪れること自体、スィク教寺院が身近に存在するインドのパンジャブ出身者や信徒でなければ馴染みがない。一方、信徒やパンジャブ出身者であれば、移住後間もないとしても、寺院やランガルは身近な施設であり、寺院を訪れランガルで食事をとることは、出身地インドでの経験の延長線上にあると言える。泊まる場所が見つからない時や食事がありつけない時、寺院にいけば何とかなる、という安心感を多くの信徒がもっている。生活の忙しさや経済状況など、事情はさまざまであるが、信徒にとってはランガルが家以外での食事の機会となりえる。

ランガルに付随する宗教実践

上述のように、同じものを分かち合っ
て一緒に食べるというランガルそのものが宗教実践のひとつとなるが、食材の寄進、調理や給仕、片付けなどのセーワをおこなうことも宗教実践となる。これらのランガル運営のために必要な仕事に携わることは、信徒にとって典型的かつ身近なセーワの例である。

また多くの場合、ランガル・ホールに行く前に、聖典の読誦に耳を傾けたり、讃歌を歌ったり聴いたりしながら、礼拝ホールでひとときを過ごす。時間帯によっては読誦も讃歌もないが、それでも部屋の中央に置かれた聖典に額ずき、その後しばらく静かに座ってホールに滞在する。このような礼拝ホールでの時間は、信仰と向き合う時間をもつことを意味する。寺院でのランガルの食事が第一の目的だったとしても、ランガル・ホールに行く前に、まず礼拝ホールに足を運ぶため、ランガル以外の信仰実践が付随することになる。

コミュニティ外部との接点

スィク教の祝祭日に野外イベントがおこなわれ、そこでスィク教団体が食事や軽食をふるまうことがあり、これもランガルにあたる。信徒のほか、イベントに遊びに来た人、

その場に居合わせた人にもランガルが提供される。いくつかのスイク教団体は、自然災害等の被災地やコロナ禍での炊き出しをおこなっている。周囲からはボランティアの炊き出しとして認識されるが、これもランガルである。

寺院外でのランガルの準備や運営、片付けもまた、神への奉仕実践であるセーフとして信徒がおもに担っている。寺院内のランガルと異なるのは、多くの信徒ではない人々にランガルを提供する点である。寺院内のランガルは実質的にはおもに信徒に提供されるが、寺院外のランガルはスイク教徒およびパンジャブ移民コミュニティ内外両方に向けたもので、コミュニティ外部との接点となる。

5. 移民社会におけるランガル

上記のとおり、寺院内外でランガルが宗教実践の機会となっているが、その実践が移民や移民社会にどのような影響を与えているのだろうか。以下では、おもに移民と食という視点から、ランガルの役割を考えてみたい。

「味」の継承

出身地から離れて暮らす移民は、出身地の慣れ親しんだ食事の再現を試みる。しかしながら、移住先での調理法の伝承機会の確保は難しい（田口 2011）。また、出身地と同じ食材や調理器具を使用することも容易ではなくなる。インド系移民の多いトロント近郊においては、それらの食材や調理器具の入手は不可能ではないが、出身地での値段に比べ割高であるため、気軽に購入しにくい。また、仕事に多くの時間を割くため、帰宅後に調理時間を確保するのが難しいことも多い。

このような、移住先での料理の再現や伝承の難しさを考えるとき、寺院でのランガルに意義を見出すことができる。前述のように、ランガルでは家庭で作るのを敬遠しがちな料理が提供されることも珍しくない。移民第一世代が自宅で作ることが難しくても、ランガルに行けば懐かしい味があり、その味を第二世代の子どもに伝えることができる。ほとんどの料理が寺院のキッチンで調理されているため、レシピを知りたければ聞くことができるし、調理を手伝いながら作り方を習うことも可能である。

移住先でのアイデンティティ

自身のルーツに由来する食事が、移民のアイデンティティに影響を及ぼすことが指摘されている（田口 2011、安井 2011、櫻田 2021）。各家庭における食事に限らず、スイク教寺院のランガルでの食事も、移民のアイデンティティに作用するだろう。ランガルでは北インドの典型的な菜食が提供され、スチール製の食器を使い、床に座って食べる。

ランガルでの食の慣習は、移民先であるカナダの一般的なそれとは異なる。そのため、何をどのように食べるかというランガルでの経験が、移民のアイデンティティ形成に寄与すると考えられる。

また、どこで誰と食べるかという点も、アイデンティティに影響を与える。ランガルが常に準備されているのはスィク教寺院であり、そこはスィク教徒にとっての信仰実践の場である。信徒以外も自由に入出りできるが、寺院に足を運ぶ人の多くは、信徒を含むインドのパンジャブ出身者である。ランガルでの食事の機会は、同席するもの同士のコミュニティ、つまり、スィク教徒またはインドのパンジャブ出身の移民コミュニティを意識させることにもなるだろう。

櫻田 (2021) は食をめぐる一連の行為が集団間の差異化をもたらす一方で、集団内部において結束を高める共同化の作用をもつという。ランガルでの食事という行為も、スィク教徒移民およびパンジャブ移民という集団の差異化と共同化をもたらし、移住先でのアイデンティティ形成につながっていると考えられる。

セイフティ・ネットとして

スィク教徒やパンジャブ出身者にとって、ランガルが食事の選択肢として存在することは前述したとおりである。日々の忙しさや経済的な不安定さなど利用する背景は異なるが、ランガルが、生きていくために必要な食事を提供してくれるセイフティ・ネットとして機能している。ランガルを提供するスィク教寺院が、一般的にはスィク教徒コミュニティの宗教施設として認識されていることを考えると、寺院に足を運び慣れていない人がランガルを日々の食事の選択肢として利用することは難しいだろう。しかしながら、寺院に馴染みのある人にとっては、いつでも食事にありつけるセイフティ・ネットとなっている。

一方、被災者やコロナ禍での生活困窮者向けに実施される寺院外でのランガルは、利用者が限定的ではないセイフティ・ネットの一部として機能する。寺院のように常設のランガルとはならず、期間限定的なものであるため、いつでも頼れるというわけではない。それでも、支援の緊急性が高い場合や、確実に支援を要する場合において、スィク教団体によるランガルが催されている。このようなランガルは、信徒やパンジャブ移民などのコミュニティに限らない、すべての人々に向けたものであり、必要な時の支えのひとつとして役立っている。

6. まとめにかえて

本稿ではランガルがどのように実施され、人々がどのようにランガルに関わるのか、

またランガルが人々にとってどのような意味を持ちうるのかを記述した。出身地での信仰やその実践を再現し、さらに、出身地で慣れ親しんだ味を再現する場としてのランガルは、移民の文化実践の場となっている。加えて、信仰やその実践に関する知識や経験、出身地の食文化を次世代に継承する場でもあった。また、スィク教徒であることやパンジャーブ出身であるというアイデンティティを想起させる場にもなっていた。さらに、ランガルがセイフティ・ネット的な役割を果たしていることも述べた。ランガルという食に関する行為が、スィク教徒コミュニティまたはパンジャーブ移民コミュニティという集団の差異化と共同化に作用することも指摘したとおりである。

この集団の差異化および共有化や、移民の文化実践の場としてのランガルに着目すると、ランガルが移民コミュニティの特異性を意識させる契機となっているといえる。しかしながら、ランガルで再現され継承される文化実践は、出身地で移民が経験してきたものと全く同じにはなり得ない。誰といつどのようにランガルで食事をするのか、ランガルの献立や用いられる材料、ランガルがどのように運営されるのかなど、移住先ならではの特徴を帯びるため、完全な再現にはなりえない。また、それらを実践する第一世代と継承する次の世代とでは、経験や認識が出身地以上に異なるだろう。移住先ならではの状況を反映したランガルは、移民が移住先でつくりあげる独自の文化として捉えることができる。その独自の文化は、否が応でも移住先の影響を受けざるを得ない。言い換えれば、移住先社会を前提につくられるものである。そう考えると、移住先で独自に展開される移民のランガルは、移民コミュニティに閉ざされたものというよりは、移住先社会を舞台に展開するものとして認識することができる。移住先社会に向けた寺院外で催されるランガルからも、ひらかれた文化実践という側面を見出すことができる。このように、移民社会における「ひらかれた食の行為」としてランガルを捉えることができる。

参考文献

- 小磯千尋・小磯学 2006 『世界の食文化8 インド』 農山漁村文化協会
- 櫻田涼子 2021 「食をめぐる日常生活—飲食と社会」 河合利光編著 『食の世界を生きる—食の人類学への招待』 時潮社、pp. 119-138.
- 田口陽子 「コンタクト・ゾーンからみるインド料理—国民料理の形成と記述をめぐる」 田中雅一・稲葉穰編 『コンタクト・ゾーンの人文学2 物質文化』 晃洋書房、pp. 127-148.
- 松尾瑞穂 2011 「食と健康—インドの浄・不浄観と社会」 河合利光編著 『世界の食に学ぶ—国際化の比較食文化論』 時潮社、pp. 100-119.
- 安井大輔 2011 「コンタクト・ゾーンにおける食文化の表象—沖縄・南米文化接触地域のエスニックフード・ビジネスから」 田中雅一・稲葉穰編 『コンタクト・ゾーンの人文学2 物質文化』 晃洋書房、pp. 149-170.

あずま・まさこ
(近畿大学)